

そめちがへ

森鷗外

青空文庫

時節は五月雨のまだ 思切悪く昨夕より小止なく降りて、櫺
さみだれ おもいきり ゆうべ おやみ
 子んじもとの下に四足踏伸ばしたる猫ねものう懶くして起たたんともせず、夜更よふけて酔
 はされし酒に、明あけ近くからぐつすり眠り、朝あさめし飯と午ひるめし餉とを一
 つに片付けたる兼吉かねきちが、浴衣ゆかた脱捨てて引つ掛くる衣は紺こんにあめ
 入あかしの明石、唐とうじゆす繻子の丸帯うるささうに締しめ畢おわり、何どこ処こかけんの
 ある顔まゆしかの眉まゆしか蹙めて、四分珠しぶだまの金きんかん釵かんもて結むすびがみ髪かみの頭あたまをやけに搔
 き、それもこれも私がいつももののんきで、氣が付かずなにゐたから
 の事、人を恨むには当りませぬと、長ながひばち火鉢ひばちの前に煙草タバコ喫くみある
 お上かみに暇いとまごい乞こいして帰らんとする、代地に名うての待まちあい合あ朝あさくら倉
 の戸口を開けて、つと入り来るは四十近いでつぶり太つた男、白

の縞上布しまじょうふの帷子かたびらの襟寛えりつろげて、寄道よりみちしたお蔭かげにこの悪い道を歩かせられたため暑さも一ひと入しなり、悪いといへば兼吉つあんの顔色の悪さ、一通りの事ではなささうなり、今から帰るでもあるまじ、不肖ふしょうして己おれに付き合ひ喫み直してはと遠慮なき勸すすめに、お上かみが指図さしむして案内あないさするは二階の六畳、三谷さんやさんなればと返事待つまでもなくお方まんに口を掛け、暫しばらくは差さしむ向かいにて、聞けば塞ふさぐも無理ならず、昨夕は御存じの親方呼よびに遣やりしに、詰らぬ行掛りの未もつ纏なれて、何なに、人ひとを、そんなつひ通とおの分い疏わけを聞くあたいたとお思おもひか、帰るならお帰りと心強こころくいなせしに、一座では口もろくに利きかぬあの喰くわせもののお徳とくめ、途みちで待ち受けて連れ往ゆきしを今朝聞あしたいた悔くやしき、親方の意い気く地じなしは今始いままつたではなけ

れど、私の気にもなつて見て下され、未練ではござりませぬ、唯
 だ業が沸こえてなりませぬ、親方の歸かへつた迹あとではいつもの柳やなぎ連れん
 の二人が来てゐたこととて、附景つけげ氣いきで面白おもしろさうに騒さわがれるだけ
 騒さわぎ、毒と知りながら、麦酒ビールに酒雜まぜてのぐい喫のみ、いまだに頭痛
 がしてなりませぬとの事なり、兼吉がこの話の内、半熟の卵に焼
 塩添しほへて女の持ち運びし杯盤はいばんは、幾らか氣色を直し肝かん癩しやくを
 和やわらなかだちち和やわらなかだちち、失せた血色の目の縁ふちに上のぼる頃、お方が客は口軽
 く、未練がないとはさすがは兼吉つあんだ、好く言つた、相手が
 相手ゆゑお前に実じつがないとこの三谷が誰にも言はせぬ、さういふ
 時の第一の薬は何でもしたい事をして遊ぶに限る、あれならとい
 ふ人はないか、おれには差当り心当はなけれど、中屋なかやの松まつつあん

などはどうだらうといへば、兼吉は寂しくほほと笑ひ、あんまり未練がなさ過ぎるか知れませぬど、腹にあるだけ言つてしまひたいののは私の癖、中屋とまでいはれては黙つてはゐられませぬ、松つあんならぬ弟の清さん、浮氣らしいがあの人なら一日でも遊んで見たいと兼て思つてをりました、なるほどさうありさうな事ではあれど、弟の方にはしかもお前の友達の小花といふ色があるではないか、頼まれもせぬにおれから言ひ出し、今更ら理窟をいふではなけれど、噂に聞けば小花と清二とは、商売用で荻江の内へ行き始めし比、いつとなく出来た仲だとやら、その上松つあんよりは捌けてゐるやうでも、あの生真面目さ加減では覺束ない、どうやら常談らしくもないお前の返詞がおれの腹に落ち兼ね

る、お前は本当に清さんと呼ばせる気か、はい本当に呼んでおもらひ申す気でございます、小花さんに済まぬとは私にも熟く分つてをれど、清さんならと思ふも疾うからなれば、さうなる日には小花さんにはかうと思ひ定めてゐるも疾うから、お徳さんなぞのやうにけちなことは私はせぬ、私の心を打ち開けた上で、清さんは何とおいひか知らねど、嫌とならそれまでの事、万に一つも聞いてもらはれたら、それから先は清さんの心次第、お前の親切に絆ほどされて一旦かうはなつたれど、それでは小花に義理が立たぬ、これきり思ひ切れとなら、思ひ切つて小花さんに立派あやまぶんに謝る分のこと、清さんに限つて小花さんを私わたしに見変へるといふはずはなけれど、さうなれば私は命も何も入りませぬ、それぢや命掛といふ

のだね、^{すじ}凄^すい話になつて来た、己なんその目ぢやあ、色の浅黒い
 瘦^{やせ}つぽちの小花より女は遙^{はる}兼^かちやんが上だ、清^かこうは慥^{たし}か二十五
 でお前には一つ二つの弟、可^か哀^あがられて夢中になつた日には小花
 には氣の毒なれど、呼ぶだけは己が呼ぶ、跡は兼吉つあんの腕次
 第だと、座を外^{はず}してゐた女を呼んで使の事を頼めば、銚^ち子持^{ようし}つ
 て立出づる廊下の摩^すれ違^{ちが}ひさま、兼吉ねえさんが、ああ下で聞い
 てよと入り来るはお万なり、髪は文^{ぶん}金^{きん}帷^{かたびら}子は御納戸地^{おなんどぢ}に大^{だい}
 名^{ようじま} 縞^{こうらえ}といふ拵^よ、好^{かせ}く稼^{うそ}ぐとは偽^{まこと}か真^{まこと}か、肉^{しし}置^{おき}善^しき体ながら
 どちらかといへば面^{おも}長^{なが}の方なるに、杯^{はい}洗^{せん}の上に俯^{うつ}むいてどつち
 が円^{たい}いかしらなどとはどういふ心か、荻江の文子^{ふみこ}さんが来て、小^こ
 梅^{うめ}子も内に遊んでゐましたといふに、そんなら呼べと座^には遽^{わか}

に賑にぎやかになりぬ、三谷が梅子に可哀さうに風を引いてゐるといへば、お万引き取りて、この子の寝ねざうといつたらございませぬ、それに幾らねんねでも、先刻さつきも文子さんが遊びに来ると、鼻をかまうかしらと相談してと笑ふ、三谷色気がない内が妙だといへば、兼吉がそこ処どこは受け合はれませぬ、竹ちやんが岡惚帳おかぼれちようしら拵しらへれば、いいえあら嫌いやなんてつたつて話すわ、梅ちやんも人真似をして、ためになるお客の上には大の字、氣に入つたお客の上には上の字が幾つも重ねて付けてあるといふ、三谷己おれの名は上の字が十ばかりあるはずとからかへば、沢山附ついてますと笑ふは瘦うぎすの小竹、あら大の字の方だわと正直まことにいふはえくぼ鬢むすの梅子、上の字なぞ付けてはお万ねえさんに悪いわねえとは、ちびの文子なかな

ませたり、下から来た女に堀田原ほったはらの使はと問へばまだといふに、
 追おひ駈かけてまた人を遣り、あの豎たてどい樋いの音に負けぬやうにと、三
 谷が得意のいっちゆう一いつ中ちゆう始まりて、日の暮るるをも知らざりけり、そ
 もそも堀田原の中屋なかやといつば、ここらには熟よく知れ渡りたる競せりご
 呉服ふくにて、今こそ帝国意匠会社などいふ仰ぎよう山さんなものも出来
 たれ、凝こつた好のみといへばこの中屋に極はまれり、二番息子の清二
 郎へ朝倉より雨を衝ついての迎むかえに、お客はと尋ねれば三谷さんに兼
 吉いさんがお出いでとばかり好く分らず、呼びに遣りし車の来ぬ内再度
 の使忙せわしければ、ともかくも直じきにと荻江まで附けさせ、お幾いくば
 婆あさんに何であらうと相談すればここでもわからず、そんな噂
 はなかりしが兼吉さんが引ひつ籠こむので浴衣あつらえの誂あつらえでもあるのか知ら

ぬとのみ、家の娘お浅あさの小花さんが待つてお出いでなれば帰にはお寄よりでせうねといふを後うしろに聞きて、朝倉に來しは点燈頃ひともしごろなり、こちらは一中を二段まで聞かせられ、夕飯もそのまま済ました処、本人の兼吉のみか、待つ人の來ぬは心落着かぬもの、文子は畳の上に置いた団扇うちわを団扇で打ち、下のが上のに着いて上がるを不思議なことでもあるやうに、厭あきずに繰り返してをれば、梅子は枝豆の甘皮あまかわを酸漿ほおずきのやうに拵こしらへ、口の所を指尖ゆびさきに撮つまみ、額ぬかに当ててぱちぱちと鳴らしてゐる、そこへ下より清さんがお出いでですとの知らせと共に、梯はしごを上り来る清二郎が拵ほそじょうふは細上布かたびらの帷子かたびら、ひんなりとした男おとこぶり振かすりにて緞あいの藍あいに引つ立つて見ゆる色の白さ、先づ一杯と盃差さかずきしたる三谷が、七分の酔を帯びたる顔わらいに笑を含み、

御苦労を願つたは私の用といふでもなく、例の商用といふでもなし、ここにゐる兼吉さんから委細の話は直しきにあるはず、一口に申せば何でもない事、ただもう清さん恋しやほうやれほといふやうなわけと、何だか分りにくい言草いいくさに兼吉氣の毒がり、一中も最もう沢山、可哀さうに私だつてまだ氣が狂ふには間があります、な
 ね清さん詰まらない事なのよ、そりやあさうと清さん今夜は別に用がないなら緩ゆつくり遊んでお出いでなさいなど、さすがに極きまり悪わるげな処へ、兼ての手筈てはずに女の来てちよつとこちらへと案内するは、
 同じ二階の四畳半に網行燈あみあんどう微暗ほのくらく、蚊かの少き土地とて蚊かは
 弔つらねど、布団ふとん一つに枕二つ、こりや場所が違ひませうと、清二
 郎の出ようとするを留とどめるは兼吉、胸のみ頻しきりに騒がれて、昨夕ゆうべ

から喫のんだ酒にわかの俄のほに頭に上る心地、切角せつかくこれまで繕より掛けなが
 ら、日頃の願の縁の糸が結ばれようか切れようか、死ぬるか生き
 るか、極きまるは今の束つかの間まと思案するもまた束の間、心はほのおとば語は
 氷こおり、ほほほほ出だしぬけ抜ぬだから胆きもをお潰つぶしだらうね、話せば直じきに分
 る事ゆゑ、まあちよつと下にゐて下されと、枕まくらもと頭の烟草盆を
 間に置いて二人は坐りぬ、姉さんがさう仰おつしやるからは定めてわけ
 がございませうが、お迎の時からこの間まに来るまで、何だか知れ
 ぬ事だらけで、夢を見るやうな気がしてなりませぬ、一体これは
 どうした次第と、いひながら取り出すは古代木綿の烟草入、徐しずかに
 一服吸ひ付くるをぢつと見つめて募るは恋、おや清さんの烟管キセルも
 伊勢新なのねえ、ええこれはといひ掛けしが、これは小花そらゐと揃そろと

は言ひ兼ねてか口籠くちごもる愛らしさ、ほんに私の好わたくしい気な事ねえ、
 清さんに話をするつてほんやりしてゐてさ、話といふのも本当は
 大袈裟おおげさな位と、兼吉の言ひ出すを聞けば、この雨の日の退屈まぎ
 れ、三谷さんが兼ちやんも誰か呼んで遊べといひしに、呼ぶ人が
 ないといつたら松つあんではどうだとの事、私がつひ松つあんよ
 り清さんが好いといつたが起おこり、小花さんといふもののある清さん
 の名を指したのがいかにもづうづうしい、どうでも清さんと寝か
 して困らせて遣やると言ひ張り、とうとうここにお前さんを連れ寄
 せて済みませねど、唯少ましの間横まにだけなつてゐて下されば好い
 といふ、それでは姉ねえさんほんのお茶番なのねえ、三十分もゐたら
 好いのでせうか、ああ好いどこぢやあなくつてよ、だが皺しわになる

といけないからこの浴衣ゆかただけはお着なさいよ、私も着かへるから
 と扱しごきばかりになれば、清二郎は羽織はおりを脱ぎながら私やあ急いで来
 たせぬか、先刻さつきから咽のどが乾いてなりませぬ、ラムネが貰もらへるなら
 姉さん下へさういつて下されといふ故兼吉すぐに廊下に出て降おりぐ
 口ちより逃あつらへるを、かの六畳からお方が見るたり、二人は一間に
 籠りゐて、ラムネの来こしをば兼吉が取入れつつ、暫しありて清二
 郎は湯にとて降りて復またた来きたらず、雨は夜よの間に上あがりしその翌あくるひ日
 の夕暮、萩江おぎえが家の窓の下に風鈴ふうりんと共に黙だんまりの小花、文子の口よ
 り今朝聞きし座敷の様子訝いぶかしく、清さんが朝倉の帰に寄らざりし
 を思ひ合せて、塞ふさぎながら湯に往ゆきたるに、聞けば胸のみ騒がる
 るお方があことばの詞の端々はしはし、兼吉さんが扱しごきばかりで廊下に出たのを

見たとは真か、清さんに限つてはと思ふはやはり私の慾目、先刻まことお仕舞してゐるとき二階の笑声を何事ぞと問ひしに、お浅さんの立ちながらいはれしは、一足先に兼吉さんが来て、内の文子と遊びに来てゐた梅子とを二階へ連つれて行き、踊を浚さらつて遣るとの事とか、私に対して昨日から何事もないかのやうに、その気の軽さがいよいよ憎い、下りて来たならどう言はうか、先さきからはまたどう言ふつもりか、所詮内気うちきなこの身には過ぎた相手とつおいつ、思案もまだ極まらぬ時、ばたばたと梯降はしごり来し梅子文子は息を切らせて、小花ねえさんに梅子さんの甚じんごろう五郎が見せたくつてよ、いいえ文子さんこそ人形のくせに笑つてばかりましたといふ後より兼吉も下りて、本当に今日の暑い事ねえと何気なけれど、さ

うねえといつたきり俯向うつむいて済まぬ顔、文子は急に思ひ出して、さうさう先刻からラムネが冷やしてあつてよ、兼吉ねえさんに上げようやと、何心なく持つて来たるサイフォンの瓶びんにコップ三つ四つ、先づ兼吉に注ついで出すを、小花側そばよりちつと見て、ねえさんラムネが好すねと声震はせじとやうやういふに、大好だいすよと無頓着なる返辞、ええ悔くやしいと反そりかへつて正体なし、その夜座敷を断りて臥ふしゐたる小花の許もとへ、つひになきこと目と鼻の間に住む兼吉が文届ふみとどきぬ、しかもその長々しきは一本の巻紙皆にせしかと思ふばかり、痛む頭を擡もたげし小花が虫を押へて拾ひろいよみ読よむその文に曰いわく、一筆ひとふでしめし上あげまい参まゐらせ候そろ、今は何事をも包まず打ち明けて申上げ候ふ故、憎い兼吉がためとお思なく可哀い清さ

んのためと御読分およみわけ下されたく候、申すも御恥かしき事ながら、お前様といふものある清さんに年上なる身をも恥ぢず思を掛け、出来ぬこと済まぬことと堪こころへれば堪へるほど夢ゆめうつつ現の境も弁わきまへず焦こがれ候ふはいかなる因果いんがか、これは久しき前よりの事に候へども、御存じの通の私が身持、昨日きのうは誰きょう今日は誰きょうと浮名うきなの立つを何とも思はず、つひこの頃までも親方と私との中は知らぬ人なき位に候ふ事とて、お前様にも清さんにも覺さとられ候こともなく打ち過ぎ候ふに、昨日さんや三谷さんのお座敷にて、ふとした常談に枝葉えだはがさき、清さんと呼んで下され、呼んで遣らうといはれた時の嬉しさいかばかりぞ、これのみは御自分の身に引き比くらべお察し下された候、さて床の展のべあり候間まに清さんと這入はいり候時の私の心は、

ただただ夢の如くにて自分にもかうかうとはつきり分りをらず候
 へども掻かい撮つまんで申し候へば、まことにまことに卑けしく汚がらはしく
 筆に書き候も恥かしき次第、お前様といふものある清さんとこの
 やうな身持の私が、すなほに彼かれ此これ申し候とも願かなの慍なふはずなけ
 れば、何事も三谷さんの酒の上から出た戯たわぶれのやうに取成とりなし、一し
 よにさへ寝たならば、なんぼ実があるとして、まだ年若な清さん、
 私はこんなお多福たふくでも側たにゐられて気持の悪くなるほどの女でも
 ある間敷まじく、つひ手が障さわり足が障るといふやうな事にならば、その
 上で言ひたい事をも申すべしと存そうらじ候ひしには違ちがいなく、かやうな
 悪しき心を持ち候ひし事、今更申すも恥しく候、さて女の性しょうは悪
 しきものと我ながら驚き候は、大人おとなしく横になつてゐた清さんの

領^{えり}へ私が手を遣^やりし事に候、その時に清さんは身を縮めてぶるぶると震ひなされ候、女の肌知らぬ人といふではなし、可笑^{おか}しな事申すやうではあれど色々の男と寝たことある私、つひにない事、はつと思つて手を引き候とたん何とも申さうやうのない心持^{こころ}致し、それまで燃え立つやうに覚え候ふ胸の直^{すぐ}さま水を浴^{あび}せられ候ふやうになり、ふつつりと思ひ切つて清さんにはその手をさへ常談の体^{てい}に申しくろめ、三谷さんの手前湯にといはせて返し候へば、清さんは何ともお思ひなさるまじく飛んだ隙^{ひまつぶ}潰しをしたなどと申しをられ候ふ事と存じ候、この始末後にて考へ候ふに、私に罰^{ばち}でも当つたのかお前様の念^{おもい}が通つてゐたのか、拙^{つた}き心には何とも弁^{わきま}へがたく候、この文差上げ候ふ私の心お前様に熟^よく分り候はんや

覚おぼつか束なく候へども、先ほど申し候とおりふ通それはどうでも宜よろしく、
 ただお前様が清さんを大事にしてさへお上げなされ候はば、私の
 願もその外ほかにはござなく候、返す返すも羨うらやましきは清さんのやう
 な人をお持なされ候ふお前様の身の上にて、たとひどのやうに憂う
 いつらいと思ふ事ありとも、その憂いつらいは頼たのみになる清さんの
 やうな優しい人を持たぬものの憂さつらさに比べては何でもない
 と、よくよく御勘弁なさるべく候、また私の事はこの上未練がま
 しく申したくはなく候へども、今までも不身持おなげな女子おなごのこの末は
 どうなり申すべきか、我身で我身が分り申さず、どうして私はか
 うなつたやら、どうして私はどうならうか知れぬやら、それはお
 前様に申しても甲斐かいなき事と致し候うて、ここに一つ申し置き候

ふは、もし少しにてもこの文の心御おわかり解なされ候はば、昨夕罪の
 ない清さんを罪に墮おとさなかつたのは兼吉だ、よしや兼吉が心から
 罪に墮すまいと思つてではないにしても、罪に墮すことの出来ぬ
 やうな何とも知れぬ心に兼吉はなることがあつたといふ事ばかり
 に候、この後清さんには指もさすまいと思ふ私に候へば、つひ何
 事もなかつたやうに御附合のほど祈り入り参らせ候かしく、なほ
 なほこの手紙御取棄おんとりすてなされ候ふとも、清さんになり誰になりお
 見せなされ候ふとも宜しく候、小花様へ兼吉よりとはさてさて珍
 しき一通、何処どこが嬉しくてか小花身に添へて離さず、中屋の家督
 に松太郎まつたろうが直りなおし時、得意先多き清二郎は本所辺べったくに別宅を設
 けての通かよひ勤づとめ、何遍なんべん言うてもあの女でない女房は生涯持ちませ

ぬとの熱心に、物固い親類さへ折り合ひて、小花を嫁に取引先な
 る、木綿問屋の三谷が媒なかだちしたとか、兼吉はまたけふが日まで、河か
 岸しを変へての浮気勤うわきづとめ、寝て見ぬ男は誰様の外なしと、書かば大
 不敬にも坐せられるべきこといひて、馴染なじみならぬ客には胆潰きもちぶさせ
 ることあれど、芸者といふはかうしたものと鼻屑ひいきする人に望まれ
 て、今も歌ふは当そのむかし初露友ろゆうが未亡人ごけなる荻江おぎえのお幾が、かの朝
 倉くらでの行違ゆきちがひを、老おいのすさびに聯つらねた一節ふし、三下り、雨の日
 を二度の迎に唯だ行き返り那加屋好なかがこのみの濡浴衣ぬれゆかた慥たしか模様は染そめちが
 違え。

青空文庫情報

底本：「舞姫・うたかたの記 他三篇」岩波文庫、岩波書店

1981（昭和56）年1月16日第1刷発行

1991（平成3）年5月15日第19刷発行

底本の親本：「鷗外全集 第三卷」岩波書店

1972（昭和47）年1月刊

初出：「新小説」

1897（明治30）年8月5日

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2006年3月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

そめちがへ

森鷗外

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>